

校長先生の日記⑪



信濃小中学校のための組曲

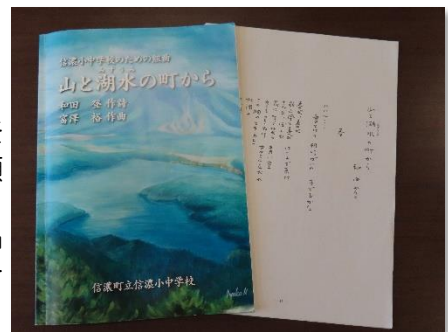
山と湖水の町から

この組曲は、初代峯村均校長先生が、開校のための多額の寄付金を、「いつかなくなる形のあるものより、何かいつまでの残る形のないものにしたい」という願いから、当時の黒姫童話館館長だった和田登さんに依頼し、作曲は全国各地で合唱指導をしている富澤裕先生にお願いして作っていただいたものです。それからずっと、この信濃小中学校で歌い継がれてきているものです。峯村校長先生は、「やろうよ思わなければ何事もできない。やろうよと思っていればいつかできる。いつしかこの歌が、信濃町の歌として町民全員で歌われる日を夢見ている」とおっしゃっています。あれから11年。当時卒業した9年生は、26歳となっています。

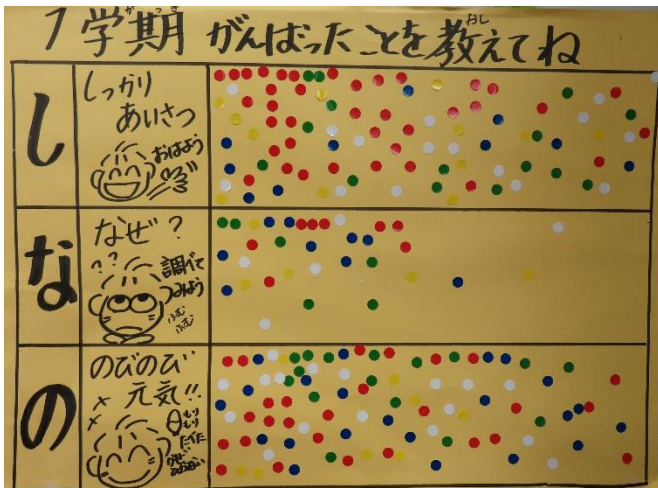
町を担う大切な若者です。この組曲を歌える若者が、これから町をリードしていくようになっていくとすると、峯村先生の夢は、夢でなく現実のものに確実になっていくと思います。

また、作詞を担当してくださった和田先生からは、「どこに立っても、自分の居るところの空が一番高くて深いんだ。みなさんの住む土地は、都会とか中央とかいわれる場所からすれば、はなれた地方ということになります。でもそれにこだわる時代はもう、終わりつつあるのです。自分の生まれた地にしっかりと、足をふみつけて立ち、やがては世界につながろうじゃありませんか。小林一茶さんは昔のひとなのに、いまでは俳句で世界の人々につながり、この地球上に喜びを与えてくれています。この組曲を歌うみなさんが、いかにも二十一世紀の人間らしく、黒姫山のふもとの町から、世界に目を向けて、力強く生きていってくださることを熱く願います」というメッセージをいただいています。

いたるところに、熱い思いが詰まっている信濃小中学校ですがここにもまた、大きな願いがありました。峯村先生がいうように、願わなければ何も始まりません。私たち教師自身が、今日の前にいる子どもたちを、世界で通用する子どもたちに、この信濃町をもっともっと発展させられる子どもたちになるようにと、強い願いをもって教育していかなければならないと改めて思いました。私たちは、そんな思いを忘れないように、これからこの信濃小中学校で教鞭をとる未来の先生方に、この思いを受け継いでいってもらえるよう、この歌を歌い続けていきたいと思っています。



この日は、全校でこの組曲を歌う時の並び方を確認しました。文化祭の中で行われる音楽会の中で披露することになっています。ご期待ください。もうすでにそれぞれのパートの練習が始まり、久しぶりに校舎の中に歌声が響いています。仕上がりが、今からとても楽しみです。



アンケート実施中!

「1学期何を一番頑張ったかな?」アンケートを実施しています。フォームで全員にやってもらうということも考えましたが、子どもたちの顔を見ながら、シールをはってもらう方法で街頭インタビューを行いました。「あいつ頑張った」と胸を張って答える子、「シールは1つだけ?全部がんばったんだけどな」と悩む子、「お休みしなかったから、のびのび元気だった」「勉強をとにかく頑張った。わからないことは調べて」と理由を語ってくれる子どもたち。思いを聞くことができました。結果は終業式で発表し、2学期の目標につなげていきたいと思っています。